文科省出身者として16年ぶりの文化庁長官

伊藤新長官、前長官の方針引き継ぎ取組実行へ意欲

文化庁長官に就任した伊藤学司氏（58）が4月1日、京都市上京区の京都庁舎で就任あいさつを行った。

伊藤氏は１９９１年に旧文部省入省。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ＣＦＯ・企画財務局長や高等教育局長を歴任し、昨年7月より文化庁次長を務めていた。なお、文部科学省行政官出身の長官は玉井日出夫氏以来16年ぶりとなる。職員に向けた就任あいさつで、伊藤長官は「都倉前長官に示していただいた大きな方針を、私は行政官出身の長官として実行しながら成果を上げていきたい」と力強く述べた。

その後行われた取材では、特に力を入れたいこととして国立劇場の再開場を挙げ、「確実に軌道に乗せなければならない。単に劇場をつくるということだけではなく、まさに我が国の伝統芸能の拠点、人材育成を含めて非常に大きな拠点なので、先頭を切って取り組んでいく」と述べた。

職員に向け意気込みを語る伊藤長官（写真：文化庁提供）

伊藤長官のあいさつ概要は次の通り。

「今日、都倉前長官の後を受け、24代目の長官に就任しました。都倉前長官に示していただいた大きな方針を、行政官出身の長官として実行しながら成果を上げていきたいと思います。加えて、私は35年間、文部省、文部科学省で働いてきましたので、それぞれの課で皆さんがどんな仕事をしているのか、どんな苦労をしながら日々の業務をしているのかということを十分承知しているつもりです。今『働き方改革』と言われていますが、文化庁はどんどん所掌が広くなっており、皆さんの仕事は日々、意識をして改革をしていかなければどんどん増えていってしまいます。業務の効率化を進めながら、それでいてしっかりと成果を出していく。難しいことですが、二兎を追っていきたいと思っていますので、皆さんと力を合わせていければと思います。

もう一点、（文化庁は庁舎が東京と京都）二つに分かれているので、『一つの文化庁』という形で取組を進めるには、少し難しい点が出てくるのかもしれません。ただ、文化庁は一つです。やはり文化は全体として相互に関連しながら、新しいものを為し、そして古いものをしっかり継承していくことが大事です。庁舎は二つに分かれていますが、それぞれの庁舎にあること、働くことによって、いろんな気づきがあると思いますので、相互に共有してもらい、全国の文化振興のためにいい仕事ができればと思っています」